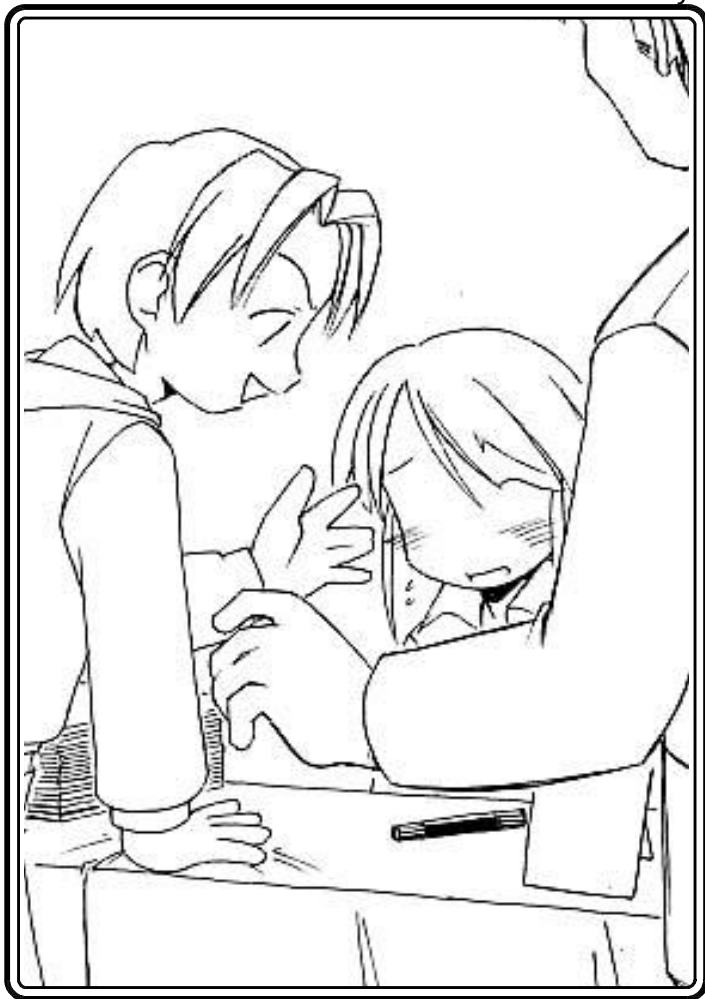


サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

Division C1:第2回ジャーナル

“ヒーロー”

Written by 美神弘貴



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

●二人のユウ

達彦に唇を奪われたユウ。出てきた声は少し低い。

「君、何をやったんだ」

回りのステップが血相を変える。たちまち達彦は引き離された。回りのファンは怒り以前にショックで茫然自失。

「すげー痺れちゃえ！」

「待って」

発作でも起こして転倒する矢野達彦。

「速いぞ！」

後ろから風のように飛び出した南かるまが、ユウの手を取り一目散。後には床に倒れた矢野達彦とたくさんのファン連が取り残されていた。

その時だった。
「はっはっは！ この会場は、我等ゼノンが乗っ取った！ 坊主、良くやった。これでユウの声は我々のものだ」

ステージの上には怪人とそれに従う戦闘員数人。すわ敵かと鋼達彦はカードを取り出した。

さて、何がなんだか解らないうちにその場を離れた二人だが。慌てて飛び込んだのは非常階段。

「えーと。とりあえずありがとう。男に唇奪われるなんて思っても見なかったよ」

その声は、やはり少し低かった。

「ひょっとして声変わり？」

南かるまはおそろおそろ。

「歌ならなんとかなるんだけどね」

不意に後ろから声がした。ん？ これってユウちゃんの声だ。

「ありがとう。とりあえずお礼を言っとく」

振りかえるとユウがもう一人。

「いいのかよお前？」

声の少し低いユウが言う。

「まあね。うちのマネージャーも無能じゃないから。お休みは30分ってとこかな？」

何がなんだか。と言うかるまに、二人のユウはにこりと笑い。

「はい、ユウ」

ぼんと放る缶コーヒー。

「サンクス。おしゃべりされると拙いよね。どうする？」

「どうするもこうするも仕方ないじゃない。なんとかして黙らせなきゃ」

「背格好も同じだし、ルックス悪くないみたいね。使えそう？」

「なんとかなるな」

「え？ え？」

訳のわからぬかるまの両脇に二人のユウが迫って両方からギュッと腕を掴んだ。

「君、名前は？ 年は？ ご両親は芸能活動に理解ある」

なんだこの展開は。と言う流れである。

「ねえ、さっきの魔法でしょ。実は私達もなの」

さっと、ユウはボーションのピンを取り出した。

「ま～たあたしをのけ者にして」

戸塚泉はご立腹。焼きたての胡桃クッキーをポケットに、デパートの屋上へ一人向かう。

「えー？ 屋上行かないの？」

「申し訳ございません。只今イベントで入場制限が掛かっております」

エレベーターのお姉さんはそういつて屋上手前でドアを開いた。

「下へ参ります。9階催物会場では只今沖縄物産展を開催中です」

しかたなしに10階食堂街で降りる。あとは階段で行こう。ところが普通の階段では行けない。案内板を見て非常階段を探す。

「あった。ここね」

防火扉を開いて中に入ると、なにやら途中の躍り場の方で人の話し声が。

「じゃあ、君達は調査に」

「ええ。この街つもの凄いいエネルギーが噴出しての。他じゃあんまり見掛けないよ」

（これって、また私に内緒で面白いことやってるの？ 酷いよみんな）

「ちょっと！ その声はかるまね。またあたしをのけ者にする気？」

泉は階段を駆け上がる。そこには、南かるまとふたりのユウが階段に座って話をしていた。

「ユウ君が二人？」

「しっ、内緒だよ。僕達いとこなんだ」

代わり番こにじっと見つめる。背も体型も顔も、二人はうり二つ。

「僕がダンスやアクション担当」

「私が歌を担当」

「つまり二人で一人前のユウってことなんだってさ」

「これで少しは誤魔化せるんだけどね」

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

ちらりと小瓶を泉にも見せる。二人はチャーマーであるようだ。

「そろそろ時間だね。君も来る？」

言ってる意味が掴めなかったけど、泉ははっきりと

「いいわよ」

と答えた。

●ロケーション

ユウが出て行った後の騒ぎと言ったらもう大変。機転を利かせたお店の人が取り繕ってくれなかったら、どんな混乱が起こったのか？

「はっはっは！ この会場は、我等ゼノンが乗っ取った！ 坊主、良くやった。これでユウの声は我々のものだ」

レビッシュが主題歌を歌うヒーロー番組。ゼノンのテーマが流れる中、怪人のコスチュームを着けた男と、数人の戦闘員がとんぼを切りながらステージを回る。事態の進展に鋼達彦は目が点、なんか変だ。

「どうだお前等。ユウを返して欲しいか！」

「返してえ〜」

後ろから回ったサクラが叫ぶ。

「よ〜し。ならゼノンに従うのだ。おいお前等」

「ウィー！」

戦闘員が、客席から何人かのファンを引っ張ってくる。久保田香織も鋼達彦もステージ上に連れて来られた。

「さぁ〜お前等。ユウの声を返してもらいたかったら俺達の言う通り動くんた。いいいな！

『おふる わいわい入りましょ』」

戦闘員がこっけいな振り付けで見本を見せる。この頃には、ファンもこう言うハブニングイベントなのかと乗ってきていた。

そして、頃合を見て現れたヒーローとの戦い。ゼノンはこの世界の子供達を狙う異次元の魔王。そして、魔道戦士ジャスティーは子供たちの守り神。自身はそれほど強くないけれど、勇気ある少年少女に魔法を使わせることが出切る。まだ始まったばかりだが、毎回事件が起こる土地の子供達が実質ヒーローになると言う設定のために、幼稚園児から低学年にかけて人気上昇中。「ジャスティーブレス！」

掛け声と共にカラーの照明がステージの子供たちに振り注ぐ。

「さあ、みんな！ やっつけるんだ」

襲いかかる怪人は、子供達の動きに合わせて

ふわりと投げ飛ばされたり、払う一撃でくると吹っ飛んで行く。そして、

「さあ、勇敢な子供達。僕に力を与えておくれ」

ＴＶのシーンそのままに、ステージの子供はジャスティーに手をかざし声援を送る。

「行くぞ！ ゼノンの使徒！ ジャスティーパー！！」

最後に怪人も倒され爆発音と小麦粉の煙と共に舞台の下へ。そして、ステージの後ろから現れるユウとかるま。

「皆さん。ユウをゼノンに操られてた子から助けてくれたのはこの子。ユウの新しいお友達、南かるま君。そして戸塚泉ちゃんです。みんな、ビックリしたでしょ。レビッシュの新曲、魔道戦士ジャスティーのエンディング主題歌『クレード〜信じたい』を聞いて下さい。さ、みんないっしょに」

バラードテンポの前奏が流れる。

ユウの声は何時の間に元通りに戻っていた。

「どう言うことが説明してもらおうか？」

帰り道。南かるまと鋼達彦に詰め寄られていた。そこへ、すーっと車が横に付けてドアが開く。

「かるまくん。考えてくれた？」

ステージ衣装のままのユウが手招きする。中にはすでにちゃんと、戸塚泉が座っている。

「送るよ。お友達も一緒にいいですよ」

「うん」「待て、かるま。おい」

成り行きでユウの横に乗る二人。

「かるまくん。この子もそうなのかい」

鋼達彦にはどう言う意味か掴みかねたが、かるまは静かにそうだと頷く。

「じゃあ、この子も魔法使いなんだ。話が早いや。今度近くでロケがあるんだけど。加わらないかい」

ユウは少し低い声で笑ってそう言った。

「実はね。ゼノンのお話は本当なんだ。僕はロケ地の林が怪しいと思ってる。そこが玄武の位置だから。と言うことで、これ、オーディションの案内。局の方になしつけてあるから、魔法ＯＫだよ。いろいろ誤魔化してあるからね」

●次回選択

ア：オーディション会場

イ：男の子のユウ

サランの戦士 ~Little Hero Paradise~

ウ：女の子のユウ

その他

- マスター通信

んー文字化けに気がつかないで再送が遅れました。申し訳無い。そんな訳で第二回でござい
ます。P C 増えるといいな。

担当：美神弘貴